

戦前から60年代まで 現実政治を生きた知識人の軌跡

オンライン版

矢部貞治関係文書

原本所蔵：政策研究大学院大学図書館

監修：伊藤 隆 東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授

刊行にあたって

東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授 伊藤 隆

東大法学部政治学科の教授であった矢部貞治は、昭和十年代、日本の危機的状況のなか、その突破を目指す政策研究団体——昭和研究会、国策研究会、海軍省調査課関係の政治懇談会等々のリーダー的役割を果たし、また近衛文麿のアドヴァイザー的地位にもあった。彼はそこで手にした文書を丹念に保存した。戦後、東大教授を辞任した後も、憲法調査会、公安審査委員会、拓殖大学総長等々多くの職に就いて活躍し、中曽根康弘とも深い関わりを持った。本文書群は、戦前戦後を通じ、彼が遺した膨大な原史料で構成されている。

彼は詳細な日記をのこし、それらの大半は既に読売新聞社から公刊されている。この日記と本文書群を照らし合わせて検討する事によって、昭和戦前・戦後期の政治・政策をめぐる、政治家・官僚・軍人・学者・ジャーナリストの姿とその動きを立体的に捉える事が可能になろう。また、彼と関係の深かった人物——例えば海軍省調査課・海軍大学校関係では高木惣吉の関係文書も公刊されており、国会図書館憲政資料室にも多くの関係者の文書が収蔵されている。それらを併せて検討することによって、より深い分析が可能になるであろう。

本文書群は、遺族から衆議院憲政記念館に寄託されたもののうち、日記を除く大半を筆者の勤務していた政策研究大学院大学に移譲、後に遺族から寄贈を受けたものである。憲政記念館にも日記以外の若干の文書類が残されている。それもいずれ全面的に公開されることを期待する。



戦前戦後を通じて現実政治に深く関わった政治学者・矢部貞治（1902-1967）の旧蔵資料。矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて矢部が関わった諸団体の内部資料など、約六千点に及ぶ膨大な原史料を収録。激動の昭和史に迫る第一級の史料群。

出版・発売元：丸善雄松堂株式会社

昭和史のなかの政治学者——「矢部貞治関係文書」刊行に寄せて

東京大学教授 酒井哲哉

昭和史については膨大な研究の蓄積があるが、戦前・戦後の激動に政治学者がどのような対応をしたかについては必ずしも十分な考察がなされてこなかったように思う。もちろん、戦後民主主義の理論的基礎付けを行った政治学者や、これとは逆に戦時体制を積極的に支持した知識人についての研究は、ここ 20 年くらいの間にずいぶん研究が進められてきた。しかし、戦前・戦後を通して現実政治に積極的に関ってきた人物の生涯を通して昭和史を検討する試みはまだ少ない。また戦後については、革新勢力を支持していた知識人に関心が集中し、保守・中道勢力に期待を寄せていた政治学者は何故だか無視される嫌があった。

その意味で、今回「矢部貞治関係文書」が伊藤隆東京大学名誉教授の監修によりオンラインで利用できるようになったこと

は、これまでの研究の空隙を埋めるための条件が整ったことであり、大変喜ばしいことである。戦前期の矢部は、近衛文麿のブレインとして近衛新体制の設計に関わり、また海軍省調査課の委嘱で大東亜共栄圏の理論化に従事した。そして戦後の矢部は、憲法調査会を通して憲法改正をめぐる政治に関与し、戦後の代表的な保守政治家 中曽根康弘とも交流していた。矢部の軌跡は、戦前・戦後を通して現実政治に関った人物の、一つの典型的な発想の型を知るうえで格好の事例なのである。

戦前・戦後を恣意的な図式で裁断するのではなく、その両者の複雑な関係性を見極めることは現在を生きるわれわれにとって重要な課題である。「昭和史のなかの政治学者」を今回利用可能になった「矢部貞治関係文書」によって浮き彫りにできたら、陰影に富む歴史像をもつことができるだろう。

「時局」と社会科学の関係を描き出す多角的な史料

桐蔭横浜大学教授 出口雄一

「時局」にどのように対応するかという問題は、社会科学にとっては極めて難しい問題である。矢部貞治は、戦時における「非常時」への対応、戦前から戦後にかけての憲法秩序の変動、更に、「戦後体制」の形成と定着といったそれぞれの「時局」に対して、鋭い観察眼と柔軟な思考に支えられて対応を行った、類稀な知性を備えた社会学者であった。矢部の「時局」に対する応答のあり方は、その時々政治や社会を映し出す鏡のようなものであると言える。

既に我々は、公刊された詳細な日記を通じて、矢部の思考とその背景にある幅広い人間関係を辿る手がかりを得ている（『矢部貞治日記』全 4 巻 読売新聞社）。この度、政策研究大学院大学が所蔵する「矢部貞治関係文書」が広く活用され得る環境を

備えたことは、社会科学が「時局」とどのように切り結んできたか、という課題をより深く考える上で、大変な朗報である。

法制史の観点からは、新体制運動のブレーンとしての著名な役割はもとより、海軍省や日本学術振興会等の場で敗戦直前まで様々な角度から検討された明治憲法秩序の性質とその限界についての史料、そして、日本国憲法の制定による新旧憲法秩序の交代という事態への対応、とりわけ、副会長として重要な役割を果たした憲法調査会に関する豊富な史料や、行政審議会・選挙制度調査会等の関連史料が目を引く。既存の研究が、本文書によってより鮮やかに色づけられ、深みを増していくことを期待してやまない。

戦前・戦後の日本政治史と政治思想を考える基本史料

首都大学東京教授 源川真希

矢部貞治は戦前日本の代表的な政治学者であり、昭和初期におけるデモクラシー研究の第一人者であった。彼は、ヒトラーが台頭するドイツの政治などを観察しながら独自の理論形成を行い、日本の軍部に批判的な態度をとっていた。しかし 1940（昭和 15）年には、近衛文麿を中心とする新体制運動のブレインとして、政治の渦中に身を置くことになる。

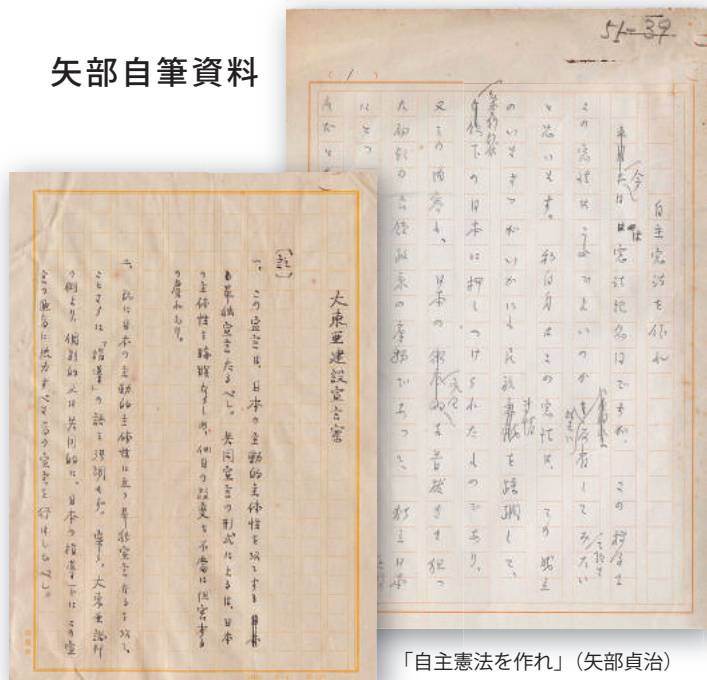
このたび、政策研所蔵の「矢部貞治関係文書」が、伊藤隆先生の監修のもと、オンラインの形で幅広く利用できるようになったのは、戦前・戦後の日本政治史研究、政治思想研究にとって喜ばしいことである。本文書は、例をあげれば昭和研究会や新体制運動、それに海軍省調査課や外務省などでの政策立案に関するもの、戦後の憲法調査会、選挙制度調査会・審議会にかかわるものなど有益な史料を含んでいる。また彼が総長をつとめた

拓殖大学についての史料、明治百年記念事業に関する文書、その他、彼が論説を執筆した雑誌などから、広い領域にわたる歴史に光をあてることができる。

そして私自身がワクワクするのは、彼の研究の足跡をうかがわせる断片的なメモなど、これまで十分に利用されてこなかった史料の存在である。刊行されている日記（『矢部貞治日記』全 4 巻 読売新聞社）や彼の書いた多くの著作と照らしあわせながら史料を読み解き、彼が理論形成をはかっていく足跡をじっくりとたどることができるのは、研究者にとってまことに幸せなことである。本文書がこれまで以上に広く活用され、戦前・戦後の政治史と政治思想の研究がなおいっそう進展することを願っている。

戦前から戦後にかけての多様な原史料群

矢部自筆資料



「自主憲法を作れ」(矢部貞治)

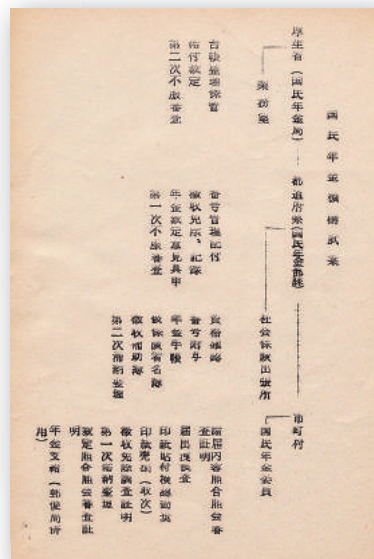
「大東亜建設宣言案」(矢部貞治)

海軍省



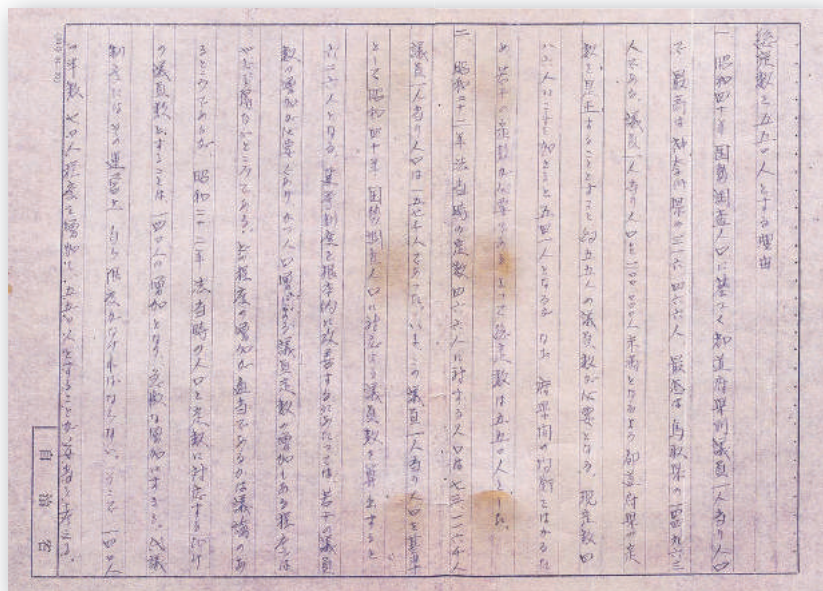
「大東亜共栄圏論」(未定稿)
(海軍省調査課 1942.9.1)

行政審議会



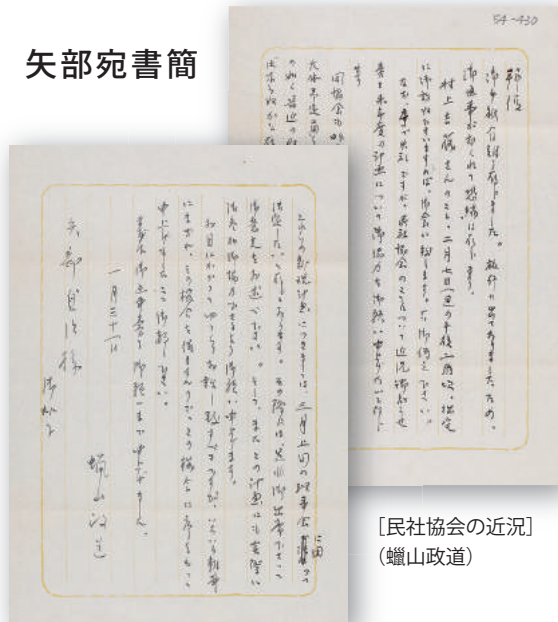
「国民年金機構試案」

選挙制度



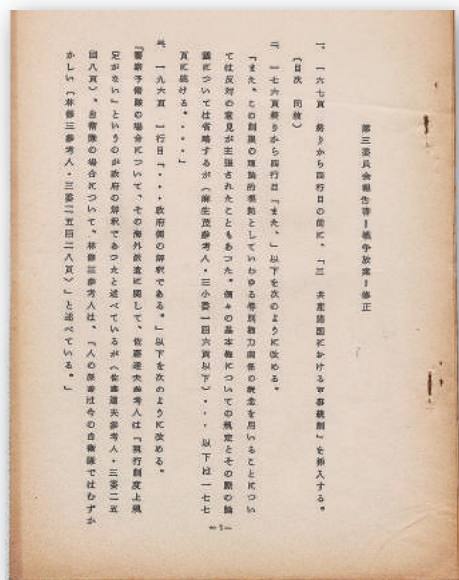
「総定数を五五〇人とする理由」(選挙制度審議会)

矢部宛書簡



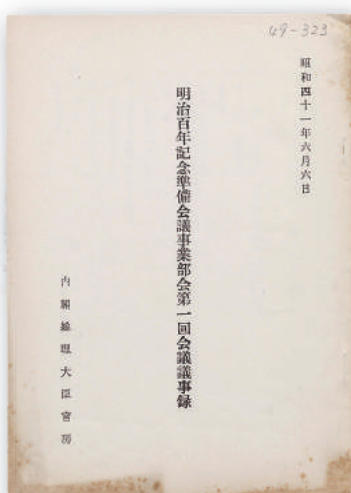
「民社協会の近況」
(蠟山政道)

憲法



「第三委員会報告書-戦争放棄-修正」(憲法調査会)

明治百年記念事業



「明治百年記念準備会議事業部会
第一回会議事録」
(内閣総理大臣官房 1966.6.6)

「楠田實資料 (佐藤栄作官邸文書)」
「大平正芳関係文書」と横断検索が可能

オンライン版

矢部貞治関係文書

矢部の手元に残された約 6,000 点に及ぶ膨大な原史料を収録。戦前から 60 年代後半までをカバーし、矢部の自筆資料や書簡のほか、戦前から戦後にかけて関わった諸団体——昭和研究会、海軍省・海軍大学校、憲法調査会、行政審議会、公安審査委員会、選挙制度審議会、明治百年記念準備委員会などの内部資料で構成されている。「近現代政治外交史データベース」のコンテンツとして、既刊の「楠田實資料 (佐藤栄作官邸文書)」 「大平正芳関係文書」と横断検索が可能である。